

2017-03-22

肥田舜太郎さんが亡くなりました

2017年3月20日、内部被曝に警鐘を鳴らし続けた肥田舜太郎さんが亡くなりました。2017年1月1日100歳の誕生日を迎えたばかりでした。

広島で自らも被曝しながら、ひとりの臨床医として被爆者とともに歩む生涯でした。

その生き生きとした姿を、スイス在住のアヤ・ドメーニクさんは、見事に映像化しました。ドキュメンタリー映画「太陽が落ちた日—Als die Sonne vom Himmel fiel」(78分)の全編にわたって舜太郎さんは登場し、ほかの誰も知りえなかった原爆投下直後から今までの被曝の実相を語ります。舜太郎さん自身、内部被曝に関する多くの本を書いてこられましたし、後に紹介するような証人尋問の記録もあります。しかし、映像は、文字がなしえない力を持っています。

「太陽が落ちた日」を観たとき、私は、改めて映像の力を思い知らされたのでした。

アヤ・ドメーニク監督は、自分の祖母土井清美さんにインタビューしながら、当時広島赤十字病院の医師であった祖父茂さんに想いを馳せます。被爆者のために献身的に働いた茂さんは、広島で何があったのかを妻の清美さんにも語ることなく、脳梗塞で倒れます。50歳過ぎでした。「原爆は体験した人にしかわからない。言葉にしても意味がない」とアヤさんにも語っていた茂さんは、1991年に亡くなってしまいます。

アヤさんは、祖父茂さんとともに働いた看護婦たちを探し出し、原爆投下後の茂さんの様子を聞き出そうと、2010年に撮影を開始しました。しかし体験を語ってくれた人たちにとっても「原爆は過去の悲惨な出来事」で、現在とのつながりを失っていると、アヤさんは感じました。そして、原爆を掘り下げ、現在に生かす映画は作れないのではと、諦めかけていました。そこへ、2011年3月11日東電福島第一原発災害が起こったのです。

もともと「核は人類を破壊するもの」という意味で、核兵器にも原発にも反対だったアヤさんの中で構想が決まりました。「現在も内部被曝に苦しむひとがいる。『福島』は核汚染という意味では『広島』以上のものだ。同じ内部被曝の被害が繰り返される」。

舜太郎さんの話の中で最も印象に残っている一人の若い女性をご紹介します。

彼女は1944年7月に松江県庁に勤めていた若い男性と結婚。彼はすぐに広島県庁に転勤。彼女は45年7月臨月になって、松江の実家で出産。8月7日「広島は全滅で家は一軒も残っていない」と聞き、一週間後広島に戻り一週間ほど焼け跡を探し回るが、夫は見つからず、8月20日に戸坂村でやっと夫と再会。彼女は最初元気で重症患者の治療を手伝っているうちに、鼻血が止まらなくなり、夫が涙声で名前を呼び続けるなか、抜けた黒髪を吐血で染めて帰らぬ人となったのです。

この女性のことを舜太郎さんは「一週間後に入市したが明らかに原爆症と思える症状で

死亡した松江の夫人は、内部被曝問題への執念の原点ともなった」と記されています¹⁾。

このエピソードは、原爆症認定集団訴訟で証人に立った舜太郎さんの尋問調書²⁾（2004年9月3日）にも詳しく出ていますので、ぜひともお目通しください。

8月6日朝8時15分広島市でピカにあうことなく、後から広島に入り、初めケガも火傷もなかった人たちが原爆症と同じ症状で次々と亡くなっていく。その原因は呼吸や食べ物と一緒に放射性物質を体内に取り込んだ内部被曝のためだということに、舜太郎さんは気づきました。

そして2011年3月11日以降、新たな核による内部被曝の危険に晒されているのを見たとき、じっとしてはいられなくなったのです。

何年か前、岐阜の病院で、終始にこやかに話された舜太郎さんの口から、最後に出た一言があります。私はそれが忘れられません。

「いい加減なことをやっているのなら、医者なんか辞めてしまえ！」。

(文献) :

- 1) 肥田舜太郎、鎌仲ひとみ「内部被曝の脅威—原爆から劣化ウランまで」(2005年)ちくま新書、P.38-40
- 2) 原爆症認定集団訴訟・記録集刊行委員会[編]「原爆症認定集団訴訟たかひの記録—明らかにされたヒバクの実相—第2巻資料集」(2011年)日本評論社、P.502-27.